

2024年度

一般推薦・社会人Ⅰ期・帰国生Ⅰ期・外国人留学生入試（社会環境学部）

小論文（100点 90分）

問題 次の文を読んで下の1と2に答えなさい。解答は所定の解答用紙に問題順に記入しなさい。

スーパーに並ぶ肉や魚、果物や野菜はボーダレスである。生鮮食品や加工食品の産地表示をながめると、世界がいかにも身近なものかを実感できる。だが、どんな人がどのようにして生産したのか、それはどのようにして国境を越えてきたのか。生産者の顔が見えにくいからこそ、ひとたび食の安全にかかわる問題が発生すると不安は大きくなる。

輸入農作物の穀物・柑橘類のポストハーベスト農薬（収穫後に散布する防かび剤などの農薬）問題、アメリカからの輸入牛に成長を促すためにホルモン剤が投与されている問題にはじまり、輸入肉骨粉配合飼料によるBSE（いわゆる狂牛病）の発生、ブランピング野菜（下処理された冷凍野菜）の残留農薬問題、加工食品（冷凍ギョーザ等）への毒物混入、産地偽装問題など、食の安全が脅かされているという警鐘は、多方面で鳴らされてきた。これが有機農業や産地直送、地産地消の取り組みに大きく関心を集めることになり、学校現場では、給食に輸入品を使わない「国産給食」の日を設ける試みも始まった。

だが、ボーダレスであることの問題はほかにもある。第1は、その食材の旅が始まる国で生じる環境破壊である。日本の飽食は海外からの輸入によって成り立っている。日本人になじみ深いエビは主に輸入品で、東南アジアのマングローブ林を切り開いた養殖池でつくられる。病気を防ぐために薬剤が散布され、沿岸養殖池は汚染され、やがて放棄され、新たなマングローブ林が伐採される（村井2007）。グローバルな流通が各地で環境破壊をもたらしているのである。

第2は輸送にかかわる問題である。食物の輸入量に輸送距離を掛け算した「フードマイレージ（フードマイル）」という考え方が紹介され、2000年のフードマイレージは国内の1年間のすべての貨物輸送量に匹敵すると試算された（中田2001）。フードマイレージが長ければ長いほど、輸送でのCO₂排出量が増え、環境に与える負荷が大きくなる。生産者と消費者の距離を縮め、国産の食物を地産地消に近い形で選ぶことが、国内農業だけでなく、温室効果ガス削減にも貢献できるのである。

農業の担い手の高齢化や食料自給率の低下、農村の過疎化が進むなかで、「農業の多面的機能」が「発見」された。農業が農産物の生産だけでなく、国土の保全、水源涵養、自然環境の保全、景観形成、文化の伝承、保健休養、地域社会の維持、食糧安全保障といった機能を果たしていることが、あらためて認識されたのである。農業の多面的機能への着目は、農業の近代化が無視してきた農の機能を発見し、復権させようとするものである。

都市との交流で農村を活性化し、農業の多面的機能を維持しようとする試みに、グリーン・ツーリズムがある。マス・ツーリズムに対比される、新しいツーリズムとしての農村滞在型の観光形態である。農村に滞在してバカンスを過ごす英仏の例に倣い、農林水産省は農村に民泊して余暇を楽しむグリーン・ツーリズムを推進し、各自治体も農村体験プログラムや農家民泊の情報を発信している。農業体験やオーナー制度を積極的に展開する農家もある。牧場の動物に触れ、農畜産物を食べ、宿泊できるファーム・インはその好例である。

農家と都市住民を結ぶ NPO（非営利団体）もある。棚田の維持には手間と労力がかかるため、各地で維持が困難になり、荒廃が目立つようになってきた。こうした状況のなかで、都市住民に棚田での農業体験の機会を提供する NPO や、棚田オーナー制度のもとで棚田農家と都市住民との交流を深める NPO が各地で活動している。

食の安全や自然環境の保全といった農業の多面的機能の考え方は、輸入食料品に価格面で押されてきた農村への追い風のように見える。それは農業と農村に限らない。林業と山村、漁業と漁村もまた、経済性と効率性に還元されない多面的機能を担ってきたことが意識されるようになった。

だが、低所得者は食の安全に不安があっても値段の高い国産品には手が出ない。逆に、値段が高くて食の安全を優先する消費者の前には産地偽装問題が現れる。過疎地では高齢化によって耕作放棄地が増え、中山間地域では消滅の危機にある「限界集落」（大野 2005。農林水産省の 2005 年度調査では「無住化危惧集落」という用語が用いられている）がクローズアップされるなど、問題の根は深い。

農林水産業もしくは農林漁村の多面的機能とは、地域が日常のなかで発揮してきた多面的機能にはかならない。多様で複合的な生業世界の物質循環、それを担ってきたローカルなしくみは、近代化という単一のものさしでは、「遅れ」や「周辺」を意味し、「開発」されなければならない対象とされた。その結果、地域は弱体化し、多面的機能を果たせなくなった。

では、どのようにすれば地域は元気になり、本来の多面的機能を発揮し、自然環境を守っていくことができるのか。ローカルに着目することに、どんな意味があるのだろうか。

出所) 関礼子 2009 「生業の近代化とグローバル化」 関礼子ほか『環境の社会学』有斐閣、pp.23-27
(図表は略)

- 1 この文を 300 字～400 字で要約しなさい。
- 2 この文で主張されていると判断する内容について、500～600 字であなたの見解を述べなさい。